

演習問題 5.3 補題 5.8 及び命題 5.7 を証明せよ。

補題 5.8: 最初に「あるゼロでないベクトル x が存在して $Bx = 0$ ならば $\det(B) = 0$ 」を示す。結論を否定すると $\det(B) \neq 0$ なので B には逆行列 B^{-1} が存在する。 $Bx = 0$ の左から B^{-1} をかけると、 $B^{-1}Bx = B^{-1}0 = 0$ であるが、 $B^{-1}B = E$ なので $B^{-1}Bx = x$ となり $x = 0$ となるが、これは矛盾である。

次に「 $\det(B) = 0$ ならばあるゼロでないベクトル x が存在して $Bx = 0$ 」を示す。行列 B のサイズを n とすると $B = (b_1 \dots b_n)$ と書ける。 $\det(B) = 0$ より $\text{rank}(B) < n$ となり、 b_1, \dots, b_n は 1 次独立ではない。よってスカラー x_1, \dots, x_n が存在して

$$x_1 b_1 + \dots + x_n b_n = 0$$

となる。 $x = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$ とおくと、 $x_1 b_1 + \dots + x_n b_n = (b_1 \dots b_n)x = Bx$ となるので証明が終る。

命題 5.7: λ を $\Phi_A(t) = 0$ の解で $\lambda \in K$ とする。このとき $\det(\lambda E - A) = \Phi_A(\lambda) = 0$ なので補題 5.8 より、あるゼロでないベクトル x が存在して $(\lambda E - A)x = 0$ となる。このとき $Ax = \lambda x$ となるので、 λ が A の固有値である事が分かる。

逆に λ が A の固有値のとき、ゼロでないベクトル x が存在して、 $Ax = \lambda x$ となる。 $\lambda x = \lambda E x$ なので、 $(\lambda E - A)x = 0$ となり、 $\Phi_A(\lambda) = 0$ となる。 $\lambda \in K$ は固有値の定義より明らか。**明らかという言葉は学生は使用してはいけない。この部分はきちんと書く事。** よって証明が終る。

演習問題 5.4 次の行列の固有値固有ベクトルを求めよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \qquad (2) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$(1) A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \text{とおく。固有方程式は } \Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^4 = 0 \text{ なので、固有値は } 0 \text{ である。}$$

0 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、 $y = z = w = 0$ が成立している。よって固有ベクトルは

$x = \begin{pmatrix} x \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして $x = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

(2) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は $\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^4 - 1 = (t-1)(t+1)(t^2+1) = 0$ なの

で、 $K = C$ と $K = R$ の場合に分ける必要がある。最初に $K = R$ の場合を考える。このとき固有値は $1, -1$ で

ある。1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、 $x = y = z = w$ が成立している。よって固有ベクトル

は $x = \begin{pmatrix} x \\ x \\ x \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。-1 に対応する固

有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、 $x = -y = z = -w$ が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ -x \\ x \\ -x \end{pmatrix}$

の形をしている。特に固有ベクトルとして $v_2 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}$ を選ぶことが出来る。

次に $K = C$ の場合を考える。このとき固有値は $1, -1, i, -i$ である。1 及び -1 に対応する固有ベクトルは

$K = R$ の場合と全く同じである。 i に対応する固有ベを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、 $y = ix, z = iy, w = iz, x = iw$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ ix \\ -x \\ -ix \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして $v_3 = \begin{pmatrix} i \\ -1 \\ -i \\ 1 \end{pmatrix}$

を選ぶことが出来る。 $-i$ に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると、 $y = -ix, z = -iy, w = -iz, x = -iw$

が成立している。よって固有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ -ix \\ -x \\ ix \end{pmatrix}$ の形をしている。特に固有ベクトルとして $v_4 = \begin{pmatrix} -i \\ -1 \\ i \\ 1 \end{pmatrix}$

を選ぶことが出来る。

(3) $A = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。固有方程式は $\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^4 - 2t^2 + 1 = (t-1)^2(t+1)^2 = 0$ なので固

有値は $1, -1$ である。1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると, $w = x, z = y$ が成立している。よって固

有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ y \\ x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に 1 次独立な固有ベクトルとして $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ を選

ぶことが出来る。-1 に対応する固有ベクトルを $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix}$ とすると, $w = -x, z = -y$ が成立している。よって固

有ベクトルは $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ -y \\ -x \end{pmatrix}$ の形をしている。特に 1 次独立な固有ベクトルとして $v_3 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$

を選ぶことが出来る。

演習問題 5.5 命題 5.9 を証明せよ。

A が対角化可能であるとする。 P を正則行列で, $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix}$ となるものとする。 $P = (\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n)$

とおくと, $AP = P \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix}$ となる。 $AP = A(\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) = (A\mathbf{u}_1 \cdots A\mathbf{u}_n)$ かつ $(\mathbf{u}_1 \cdots \mathbf{u}_n) \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix} =$

$(\lambda_1\mathbf{u}_1 \cdots \lambda_n\mathbf{u}_n)$ より, 各 i ($i = 1, \dots, n$) について $A\mathbf{u}_i = \lambda_i\mathbf{u}_i$ となる。よって各 i ($i = 1, \dots, n$) に対し \mathbf{u}_i は固有ベクトルである。また P が正則なことから $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ は 1 次独立である。

逆に n 個の 1 次独立な固有ベクトル $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ が存在するとする。 $P = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n)$ とおくと, P は正則

である。また

$$\begin{aligned} AP &= A(\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) = (A\mathbf{u}_1, \dots, A\mathbf{u}_n) \\ &= (\lambda_1 \mathbf{u}_1, \dots, \lambda_n \mathbf{u}_n) = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n) \begin{pmatrix} \lambda_1 & & O \\ & \ddots & \\ O & & \lambda_n \end{pmatrix} \end{aligned}$$

なので、 A は対角化可能である。

演習問題 5.6 次の行列が対角化可能かどうか調べよ。ただし K は実数の場合と複素数の場合の 2 通りの場合を調べよ。

$$(1) \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$$

$$(2) \begin{pmatrix} 1 & 0 & -2 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & -1 & -1 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & a & 1 \\ 0 & 0 & b \end{pmatrix}$$

(1), (3) については演習の時間にふれたので、ここでは (2) のみ調べる。 $A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -2 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & -1 & -1 \end{pmatrix}$ とおく。 A の

固有方程式は $\Phi_A(t) = \det(tE - A) = t^3 - t^2 + t - 1 = (t-1)(t^2 + 1) = 0$ である。

$K = R$ の場合固有値は 1 のみである。1 は重解ではないので固有ベクトルで 1 次独立なものは 1 個しか存在しない。1 次独立なベクトルが 3 個存在する事はないので対角化不可能である。

次に $K = C$ の場合を考える。固有方程式は $\Phi_A(t) = (t-1)(t-i)(t+i) = 0$ なので、固有値は $1, i, -i$ の 3 つである。各固有値に対応する固有ベクトルは少なくとも 1 個存在する。 $1, i, -i$ に属する固有ベクトルをそれぞれ v_1, v_2, v_3 である。異なる固有値に属する固有ベクトルは 1 次独立なので v_1, v_2, v_3 は 1 次独立である。よって A は対角化可能である。

演習問題 5.7 演習問題 5.4 の行列に対し $K = C$ の場合と $K = R$ の 2 つの場合に対角化を試みよ。対角化不可能な場合は理由も述べること。

$$(1) A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \text{ とする。演習問題 5.4 のとき求めた様に } A \text{ の固有値は } 1 \text{ のみであり } 4 \text{ 重解であるが,}$$

それに属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} x \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ の形をしており、1 次独立なものは 1 個しか選べない。 A が対角化できる

必要十分条件は 1 次独立な固有ベクトルが 4 個存在する事なので、 A は対角化不可能である。

(2) $A = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とする。最初に $K = R$ の場合を考える。固有値は $1, -1$ の 2 つであり, 1 に属する

固有ベクトルは $\begin{pmatrix} x \\ x \\ x \\ x \end{pmatrix}$, -1 に属する固有ベクトルは $\begin{pmatrix} x \\ -x \\ x \\ -x \end{pmatrix}$ の形をしている。1 次独立な固有ベクトルは, 例

えば $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$ の様に 2 個しか選べない。 A が対角化できる必要十分条件は 1 次独立な固有

ベクトルが 4 個存在する事なので, A は対角化不可能である。

次に $K = C$ の場合を考える。演習問題 5.4 のときに求めた様に $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} i \\ -1 \\ -i \\ 1 \end{pmatrix}$

$v_4 = \begin{pmatrix} -i \\ -1 \\ i \\ 1 \end{pmatrix}$ は 1 次独立な固有ベクトルである。 $P = \begin{pmatrix} 1 & -1 & i & -i \\ 1 & 1 & -1 & -1 \\ 1 & -1 & -i & i \\ 1 & 1 & 1 & 1 \end{pmatrix}$ とおくと P は正則で, $P^{-1} =$

$\frac{1}{4} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ -1 & 1 & -1 & 1 \\ -i & -1 & i & 1 \\ i & -1 & -i & 1 \end{pmatrix}$ となり,

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & i & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -i \end{pmatrix}$$

となる。

(3) $A = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ とおく。演習問題 5.4 で求めたように $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix},$

$v_4 = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ は 1 次独立な固有ベクトルである。 $P = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & -1 \\ 0 & 1 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$ とおくと P は正則で, $P^{-1} =$

$$\frac{1}{2} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 1 & 0 \\ -1 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & -1 & 1 & 0 \end{pmatrix} \text{となり,}$$

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & -1 \end{pmatrix}$$

となる。